十年かけて「おくのほそ道」を歩いた！

秋葉節子さん（六十九歳）

県内の旅行愛好者を中心につくる「おくのほそ道を歩く旅の会」に入り、平成十三～二十二年の十年間で東京都・深川を基点に、東北方面を回って滋賀県・大垣まで十五都県にわたる計二四〇〇キロメートルを仲間と歩きました。

今年一月には、全行程を完歩した十年間の記録集を、旅の参加者の自費で出版しました。

この旅に参加し、完歩した秋葉節子さんにお話を伺いました。

●おくのほそ道を歩くことになったきっかけ

秋田県出身で象潟（きさがた）に「おくのほそ道」の句碑があり、興味を持っていました。たまたま新聞折り込みのチラシの中に「おくのほそ道を歩く旅の会」への参加者募集があったので、友だちを誘って入会することにしました。

●どのような会ですか？

講師と一緒に「おくのほそ道」を歩く会です。当時は三十数名の会員がおり、宇都宮市の方が多く、矢板市からは四人が参加していました。また、他にも鹿沼市、茂木町、下野市などからの参加者もいました。

毎回八～二十数名が参加し、荒天にならない限り、雨の日も雪の日も歩きました。

●旅の流れ

日帰りができる時は、月に二回、宿泊の時は月に一回のペースで歩く旅を行いました。移動の基本は電車やバスで、前回のゴール地点へ行き、続きの行程を午後四時頃まで歩きました。「おくのほそ道」のルートが電車やバスから離れる福島県須賀川市からの行程では、貸切バスを利用しました。

一日に歩いた距離は、数キロメートル～二十数キロメートルで、なぜそんなに幅があるかと言うと、芭蕉が立ち寄らなかったところでも興味がある場所は積極的に訪れ、道草も楽しんだからです。

●よかったこと、つらかったこと

歩きながら講師に草花の名前を教えてもらったり、建物の歴史や句碑などについて教えてもらえたのは、勉強になりました。

つらかったのは、黒磯駅から那須温泉神社までの十七キロメートルの道のりで、後半が上りの道ばかりで、とても疲れました。

●印象に残っていること

新潟県の大沢集落開発センターで休憩をした時に、近所の方がお赤飯を用意して待っていてくれたことがうれしかったです。行く先々で見知らぬ人と話をしたり、いろいろなところで差し入れを頂くこともあり、地域の人との温かい交流も多かったです。人と物に出会い視野が広がる旅でした。

また、鯖江から湯尾峠に行く途中「伊勢大神楽」ののぼり旗を立てて、笛、太鼓に合わせ獅子舞を踊る五人の一団に出会いました。各家庭を回って舞を披露してはお礼をもらっているようで、私たちも踊ってもらい旅の安全祈願をしてもらいました。

「おくのほそ道」には、芭蕉の詠んだ句が五十句あり、旅の間に俳句を詠まれる方も多かったので、私もその時の様子を詠んでみました。

門付や伊勢よりめぐる　夏神楽

俳句に興味がなかった私も参加者の皆さんの影響を受けて、完歩後には、宇都宮市にある俳句の会に入りました。

●完歩できた感想

参加者で完歩できたのは宇都宮市の方が二人と私だけでした。健康だったこと、職場の理解があったからこそできたと思います。今までは、何をやっても中途半端だったので、十年かけて完歩できた時は「やりきった」と言う達成感でいっぱいでした。

（記者の感想）

十年かけて「おくのほそ道」を歩き、多くの人との触れ合いや有名な古刹や美術館などの道草で視野を広め、知識を取り入れたことはなかなか出来ることではないと感心しました。

秋葉さんはこの会に入ったことをきっかけにデジタルカメラを習い始め、写真を撮りためて、いっぱいの写真と感想や説明文を書き留めた三冊の分厚い記録誌を作りました。それを希望する会の仲間にもコピーして何冊も配ったとか。たいしたものと心より拍手です。今でもその時の俳句の仲間たちと時々食事をしたり、旅行に行ったり親睦を深めているそうです。

（R・K）

おくのほそ道全行程図

芭蕉が句を詠んだ滋賀県・伊吹山頂へ